カトリック札幌教区ニュース
Catholic Sapporo Diocese News

No. 43
2023年11月

発行：カトリック札幌司教区事務局広報部　〒060-0031 札幌市中央区北1条東6丁目10 Tel.011-241-2785 https://www.csd.or.jp

大阪高松大司教区誕生

今年8月15日教皇フランシスコは、教皇庁を通して大阪大司教区と高松教区の両教区を統合し、新たに大阪高松大司教区の設立、また現大阪大司教区大司教のトマス・アクィナス前田万葉枢機卿を新大司教区の初代大司教に任命すると発表された。

©大阪高松大司教区

10月9日に新教区設立ミサが大阪聖マリア大聖堂（玉造教会）にて、日本の司教団および、大阪・高松の司祭や修道者、信徒も集まり盛大に行われた。ミサの中では福音宣教省初期宣教部門副長官から大阪高松大司教区の神の民へのメッセージが朗読され、「大阪大司教区と高松教区が一つになることが、魂の救いのために豊かな霊的恩恵をもたらし、力を合わせることによって力強い相乗効果を生み出すことです。・・・両者の間に相違点があることも当然です。しかし、その違いは、多様な豊かさをもって、新しく設立された私たちの教会の活力を高めることになると信じています。」と励ましと祝福が述べられた。

新教区設立により、大阪高松大司教区が司牧する7府県の人口は18，950，964人、カトリック信者は51，835人（0．273％）、教区および修道会の聖職者188人、修道女591人、教会105、修道院82、カトリック施設236となった（数字はいずれも2022年）。

また、日本のカトリック教会15教区の中で、面積では札幌、仙台に次ぐ3番目、信者数では東京、長崎、横浜に次ぐ4番目、教会の数では長崎に次ぐ2番目となった。

なお、司教座聖堂は大阪聖マリア大聖堂（玉造教会）となったが、旧高松教区司教座聖堂（桜町教会）は、玉造とともに司教座の置かれた教会としてConcathedral（コン・カテドラル）と位置づけされることとなった。

レオ・ボッカルディー教皇大使退任

教皇フランシスコは、9月1日付で、ビテット名義大司教、レオ・ボッカルディ大司教の駐日教皇大使からの退任願いを承認された。ボッカルディ大司教の退任は、70歳になった時点で現職からの引退を前倒しできるという教皇庁の外交官のための規則を適用。なお大司教は本年4月で70歳を迎えていた。

東京にアンドレア・レンボ被選司教

教皇フランシスコは、9月16日午後7時（日本時間）に東京教区補佐司教にアンドレア・レンボ（Andrea Lembo）神父を任命されました。東京大司教区では5年間補佐司教が任命されてきませんでした。新司教のために祈りをお願いします。

なお、司教叙階式は12月16日(土)を予定。詳細は後日発表されます。

【略歴】1974年イタリア生まれ。2003年助祭叙階、04年司祭叙階。09年来日、板橋教会・習志野教会助任、府中教会主任を歴任。カトリック・ミラノ外国宣教会管区長、一般社団法人船橋学習センター「ガリラヤ」理事長、公益財団法人真生会館理事長。

訃報

ペトロ平山高明司教
（大分教区名誉司教）

7月15日午前2時23分、老衰のため大分市明野司祭の家で帰天。ソウル出身99歳。1957年3月19日福岡教区にて司祭叙階。62年パリ・カトリック大学院修士課程修了後福岡司教館勤務。69年11月15日大分教区司教に任命、70年1月25日司教叙階。日本カトリック司教協議会では、国内移動信徒委員会、要理教育委員会他多くの委員会委員長などを歴任された。2000年6月12日大分教区長退任。

パウロ 森 一弘司教
（東京大司教区名誉司教）

9月2日午前3時39分、上部消化管出血のため東京逓信病院で帰天。神奈川県横浜市出身84歳。1967年3月11日ローマにて司祭叙階。関口教会助任、主任を経て、84年12月3日東京教区補佐司教、85年2月23日司教叙階。2000年5月13日東京教区補佐司教退任。

2023年8月1日から6日、ポルトガルの首都リスボンで開催されたワールドユースデー（WYD）。世界中から150万人の参加者が集い、札幌教区からは3人の青年が参加、本紙へ感想が寄せられた。

■北広島教会　駒井瑠奈さん

私にとって初参加のWYD。まずは「楽しかった。」の感想が出てきますが、振り返ると日常と大きく異なる過酷な日々だったと思います。

しかし、日本巡礼団で体調不良者が続出したにも関わらず、私は2週間健康に過ごせたことや、式典の日にトイレへ行ったら交通規制でグループに戻れなくなり、途方に暮れていた私の目の前をパパ様が通ったこと。偶然では片付けられないほど、神様のお恵みをたくさん感じました。

また、何より私が感動したのは、カトリック信者の若者の多さです。現在は教会も高齢化が進み、「活気が感じられない」という人も多いと思います。しかし、世界中の多くの若者がとても熱心に活動をしていることを目で見て、私自身もカトリック信者であることに誇りをもち、自信をいただいた旅となりました。

最終日のミサで、勝谷司教が「WYDでの素晴らしい体験を語らないのは勿体無い。」とお説教してくださいました。どうかこの文章が多くの方に読まれ、次に参加する若者たちの勇気に繋がることを願うばかりです。

■北見教会　高橋美保さん

私は2019年のパナマ大会にも参加し、今回のリスボン大会は2回目のWYDでした。パナマもポルトガルでも数百の国旗がはためいて、数十万、数百万の人が祈る姿、喜ぶ姿、抱き合う姿は、何度見ても、何度行ってもグッとくる、私の大好きな光景です。

いつの時代でも宗教や民族を問わず、こうであればいいのにと思います。これだけ多くの国から沢山の人が来ているのに、誰も殺し合わず、罵り合うことなく、多くの喜びを分かち合うなんて、嘘みたいで夢のような光景が私の目の前にはあって、まだまだ平和の底力、可能性があるんだと感じました。これぞWYDの唯一無二の醍醐味、何度でも行きたくなります。同じ神様を世界中の人たちと分かち合って、考え続けた2週間でした。

世界を知ったぞ！なんて全然言えないけれど、カトリックの芯の一部みたいなものは少しだけ見えた気がします。私のするべきこととは何なのか、神様が望んでいることは何なのか、何が本当に大切なのか、いつも考えながら生きていきたいです。

写真左から高橋美保さん、駒井瑠奈さん、勝谷太治司教、松村繁彦師、秋元惇さん

■小樽教会　秋元　惇さん

今回の巡礼は「縁」や「発見」を多く感じられるとても素晴らしい日々となりました。

コインブラの人たちとの温かな日々、ファチマ巡礼、リスボンでの本大会、ポルト観光。その日々を通じて、日本を含め世界各地からきた青年たちとの交流の中で「世界にはこんなにもたくさんの、自分と同じように神様を信じて生きている若者がいる」ことに日常生活でうまく行かないことがあってもこの人たちがいるという安心感と、カトリックはまだまだ盛り上がれるという希望を感じました。

他の参加者と交流する中で思ったことは、みんなそれぞれ違う形でお恵みをいただいているけれど、等しく受け取ったお恵みは「あの場にいたこと」。最高気温39℃という酷暑も乗り越えた今回の巡礼団なら、「輝くこと、聞くこと、怖れないこと」を胸に、これからも神様の道を歩んでいけます。

札幌教区は司祭も若い信徒も少ないけれど、いつも神様は試練を含め必要なものを与えてくださっていることを忘れずに日々過ごしていきたいです。巡礼の詳細はカトリック大阪大司教区のYoutubeをご覧ください。

故近藤師・谷内師納骨式
両師を偲び焼香の列続く

秋晴れとなった9月24日(日)、札幌市内では3年ぶりに合同墓参が行われた。このうちカトリック白石共同墓地（札幌市白石本通墓地）では午後2時より近藤光彦師・谷内武雄師の納骨式が行われ、多くの信徒たちが参列、亡き両師を偲び焼香の列が続いた。また、この日は増設された新合葬墓の祝別式も行われた。新合葬墓は現在の合葬墓が充溢した後に収蔵を開始する。

第二回全道カトリック青年大会

「マリア様と共に歩む」というテーマで、8月12日・13日、札幌市青少年山の家で行われました。札幌、函館、旭川、帯広など道内各地から、カトリック信者以外の参加や日本人青年たちも含め今年も約100人の青年が集い、共に祈り、交流し、楽しい二日間を過ごしました。

今大会は日本でベトナム人司牧担当のグエン・タン・ニャー神父が参加してくださり、初めて会う参加者からは、直接会って話すこともでき嬉しかったという声が聞かれました。また、分かち合いの時間ではラム神父から、日本での宗教生活、ミサに参加するための困難、結婚に関する問題など、貴重な助言をいただいました。

今年の大会も去年のようにSNSを活用し周知しました。今回の大会はコロナ感染拡大も落ち着いた中での開催で、去年のように色々な制限やルールなどがなく、参加者はよりパワーアップして、ワクワクと楽しい時間を過ごせました。2日間という短い時間でしたが、神様の恵みの中でたくさんの新しい友達もでき、交流を深め、心と心の距離が近くなった、忘れられない思い出となりました。これからもこのように皆と共に過ごせる機会に恵まれるよう祈りますという参加者の感想もSNSのグループチャットに投稿されていました。

終わりに、今大会が成功のうちに無事に終了できましたのは、司教様、神父様方、日本人の方々、大会の準備をしてくれた方々のお蔭でした。特に、教区からの支援金によって、参加者の送迎のため大型バスを借りることができました。また、各教会からの応援や支援も感謝申し上げます。

神様の恵みがいつも皆様の上に注がれますよう、大会参加者一同お祈り申し上げます。

（グエン・ティ・ズェン）

大会参加者から勝谷司教へ感謝の印として
ベトナムのマリア像がプレゼントされた

中標津教会70周年

中標津教会が献堂70年を迎えました。歴史は、95年前に長崎県平戸から開拓で入植してこられた潜伏キリシタンから始まるそうです。その後、四半世紀を経て、現教会に近い丘の上に富沢司教の献堂式の下、最初の教会が建てられました。私がカトリック幼稚園に入園した時には、現在の場所にありました。幼稚園児の頃、みんなで階段を登り、坂を登って教会があった保健所の裏手にある芝生で遊んだことを覚えています。そこからの景色は、遠くは、武佐岳から裏摩周まで見渡すことができる素敵なところでした。資料を作るにあたり、前回作成したしおりやアルバムの中に、たくさんの神父、たくさんの信者の姿がありました。まだ、子供だった頃の姿や若かった頃の姿、転勤していった信者などなど、写真を見ながら懐かしい話しに花が咲きました。神様のご計画は、まだまだ続きます。これからもたくさんのお恵みが、私たちの上に降り注ぎ、感謝と愛で繋がる中標津カトリック教会でありますように、祈りを続けていきます。

（中標津教会・船田由江）

児童養護施設 天使の園100周年

100周年に際し、多くの方々に祈り支えられてきた感謝の思いを込めて、9月23日にカトリック北広島教会にて、勝谷司教と松村神父の司式による100周年感謝のミサに、子ども達と職員であずかりました。北広島教会信徒の他、ボランティアや関係機関の方々もミサにあずかって下さり、改めて天使の園がカトリック教会とともにある施設と実感いたしました。

天使の園はマリアの宣教者フランシスコ修道会が1923年に事業を開始し、今年で100年となりました。シスター方が天使病院で亡くなられた入院患者の子ども達を、病院や修道院の一室で養育をはじめたことを契機に、関東大震災の孤児の受け入れなどで子どもの数が増加したことや、生活環境の改善が必要となっているところに、キノルド司教から、教区が所有していた北広島の土地提供の申し出を頂き、1930年に北広島教会に隣接する現在の地に移転して参りました。

そして、現在に至るまでのこの100年間、教会の方々をはじめ多くの方々に支えられてきました。児童の入所理由はこの100年間の社会情勢に合わせて大きく変わり、またそれに伴い児童養護施設としての役割、支援の考え方や方法も変わってきています。今後も変化していく中で、ずっと変わらないカトリックの精神と理念をよりどころに、未来に向けて一日一日歴史を刻んでまいりたいと思います。支援が必要な子ども達やご家庭のためにお祈り頂ければ幸いです。（児童養護施設・天使の園施設長　畠山祐志）

共感する心

～寄り添い、耳を傾け、ともに歩む～

旭川地区

旭川地区

札幌地区

各地区で使徒職大会開催

北見地区

札幌地区

■旭川地区

2023年（第67回）旭川地区カトリック大会は、「共感する心～寄り添い、耳を傾け、ともに歩む～」をテーマに、8月6日から9月10日まで行われました。

コロナ渦で一堂に会することができないカトリック大会が続き、今回で3年目を迎えました。司教ミサをオンラインで配信しながら実施するハイブリッド形式の集大成と位置づけ、新たな試みとして、司教・司祭・修道者の皆様からのメッセージを大会期間中配信する取り組みを行いました。旭川地区にゆかりのある方々にたくさんのご協力をいただきましたこと、心から感謝申し上げます。

先日、最後の実行委員会を実施し、今年度の反省と次年度に向けての意見交流を行いました。カトリック大会の歴史や意義を大切にしつつ、新たな形を模索していく時期に入ったことを共有しました。また、反省の中で、旭川地区の遠方の小教区は、カトリック大会のために実働として協力できないことを心苦しく思われていることもわかりました。今、私は、実行委員長の体験を通して強く感じています。例え役員として活動できなくても、ほんの少しだけ実行委員の気持ちに寄り添っていただき、ほんの少しだけ意識を高く大会期間を過ごしていただけるだけで大会はよい方向へ大きく動いた！と。神に感謝！

来年度は、もっともっと「絆」を確かめ合える機会となりますように。（大会実行委員長・神居教会・田中真子）

■北見地区

4年ぶりにオホーツク5教会（北見・紋別・遠軽・美幌・網走）の信徒が北見に集まり、8月27日に北見地区カトリック大会が開かれました。テーマは「札幌教区で大切にしていること」。勝谷司教のお話を聞き、視野を北海道全体へ、ひいては日本、シノドスを通して世界へと眼を開かせて頂き、道東の小さな教会にあっても、兄弟姉妹と繋がっている！との、明るい展望を望んだからでした。

運営委員の方々は感染と熱中症に気を付けて準備しました。通常の北見のミサ参加の倍の60人が参加。紋別からベトナム人実習生の青年たちが労働の毎日にも関わらず10名近く参加され、母国語でのミサ曲と主の祈りを元気に歌い力を与えてくれました。若いからだけでなく、彼らから皆に会えた喜びと信仰の喜びとが伝わってきたからです。青年達はベトナム語のミサを待望していることを訴えていました。以下は、参加者の声から。

「司教講話は、司祭減少に伴う切実な現状についてでしたが、絶えずニコニコと笑顔で話され、小グループ分かち合いの予定を変更して、そのままみんなでの対話集会になりました。質疑においても大笑いしたり、私は今年のカトリック大会は司教様の笑顔が一番印象に残っています」。（北見教会運営委員長　佐藤美智子ほか）

■札幌地区

札幌地区使徒職大会が10月1日、藤女子大学で開催されました。4年ぶりの開催で参加者は約500名でした。大会テーマは「札幌地区の将来に向かって―使徒職を生き生きと―」。

今の教会の現状は、司祭の高齢化・減少、信徒の高齢化、教会堂の老朽化など課題が山積していますが、今こそ信徒が与えられた使徒職を存分に発揮し、キリストの愛を伝える生き生きとした共同体づくりが求められています。

開会式の後に大会テーマに沿ったフォーラムが行われました。旭川地区からは、市内四教会を集約するか存続するか議論の末、各教会は存続を希望しそれぞれの教会で福音宣教プランを作成し実行していることの報告。小樽教会からは、二つの聖堂（富岡、住ノ江）の維持管理と司牧

上の課題が顕著になってきたため富岡教会に統合した経緯と今後についての報告。札幌地区からは、司教から諮問された教区再編計画についての答申内容の説明がありました。

終了後、勝谷司教司式のミサが行われ、今回は当番教会を決めず市内9教会と宣司評事務局で準備・運営した結果、これまで当番教会任せだったいろいろな奉仕を分担し一体感がありました。聖体拝領では司祭に加えて信徒の聖体奉仕者5名も奉仕し、聖歌隊の歌も素晴らしく、恵み深いひと時でした。

午後からは小グループに分かれて、信徒による宣教協力、将来に向けての取り組みなどについて話し合いがあり、自由参加でしたが120名程度が参加し活発な議論が交わされました。

（山鼻教会・能町浄彦）

■苫小牧地区

9月10日、苫小牧市民会館にて第18回カトリック苫小牧地区信徒使徒職大会が開催されました。2019年に室蘭ブロック担当で第17回信徒大会（今回から信徒使徒職大会）が開かれて以来4年ぶりの大会となります。

共に集う喜び

参加者は司祭4名と講師、6教会からの信徒96名となりました。このほかに、午前の講話のみを聞きに来た方、午後からのミサに参加された方もいました。

札幌教区難民移住移動者委員会の西千津さんによる午前中の講話は、「ともに歩む教会をめざして―あなたの隣にいる外国人」のテーマで、スクリーンに映し出されるたくさんの写真を見ながら、様々な角度から西さんが関わっている外国人の現状をお聞きすることができました。

午後からは10のグループに分かれて分かち合いをし、自分の感じたことを話し、仲間の話に耳を傾ける時間を持ちました。苫小牧教会からは15名のベトナムの青年の参加があり、ミサでは日本語での「主の祈り」に続いてベトナム語の「主の祈り」が唱えられ、祈りの一体感を味わうことができました。

2年後の2025年（室蘭ブロック当番）、再会を約束して閉会となりました。

（苫小牧教会・窪田美津子）

■函館地区

8月27日、「函館地区カトリック大会」が開催された。合同ミサの後、今年はアンセルモ・李動珍（イ・ドンジン）神父による講話「韓国のカトリック教会」を拝聴した。

韓国では日本同様、その昔、鎖国が行われ、キリスト教が布教されるようになるにはかなりの時間が必要だったそうだ。しかも非常に厳しい迫害を受け、多くの殉教者が出たという。多くの苦難を乗り越えたのには、それだけ韓国の方々の強い信仰心とキリスト教故の教え「愛」があるからなのだろう。

現在の韓国における信者数、司祭数は日本との人口比率を考えると驚くものがある。具体的な数字は失念したが、キリスト教がしっかりと根を下ろし、韓国の人たちの心の支えとなっていると感じる。

実際、現在の日本国内では多くの韓国人神父が活躍されている。習慣が異なる異国で生活し、宣教することは非常に大変かと思うが、日本で奉仕する神父は皆さん、きっと神様からの導きと感じていらっしゃるのだろう。

かつては日本国内の布教はパリミッションなどから派遣された宣教師が中心だったが、イタリアですら司祭数が減ってきていると聞いている。物質的な豊かさは昔と比べると比較にならないが、私は人があるべき姿、歩むべき道は今も昔も変わりはないと考えている。

キリストの言葉、そのひとつひとつが私たちの糧であり、国家、民族の垣根を越えたその先にこそ「主の平安」があるのではないだろうか。

（元町教会・上野博司）

第62回千軒岳殉教記念ミサ

7月30日(日)、大千軒岳の山中、金山（かなやま）番所跡において62回目の千軒岳殉教記念ミサが奉納された。

以前は千軒岳巡礼ミサと呼称していたが、最期まで信仰を棄教しなかった殉教者を称えるミサとして今日では記念ミサとして奉納している。

毎年のようにこのミサに参列している方、函館地区外からの方、カトリック未信者の方など、約20名が参列し、パウロ三木・佐久間力神父の司式でミサが奉納された。

殉教地でのミサはは国内に幾つかあるが、他と異なるのは片道2時間もかかる山奥でのミサなのだ。大千軒岳はその昔、松前藩が砂金を採取していた金山であった。当時、禁教だったキリスト教を信仰するキリシタンたちは逃げるように、隠れるように鉱夫として潜み、働いていたが、幕府の圧力により、

100名を超えるキリシタンが処刑された。

彼らは何を望み、何を想ったのか…。信仰の自由が保障され、飽食の時代である現在、私にとってこのミサは何故、信仰しているのか自身を見つめ直すミサでもある。

皆さんも是非、一度、自身を見つめ直すためにもご参列下さい。

（元町教会・上野博司）

札幌地区教会学校合同サマースクール

2023年8月11日、札幌教区カトリックセンターと北一条教会を会場に「教会学校合同サマースクール」を開催しました。北一条、円山、山鼻、月寒、小野幌、北広島、恵庭、千歳の8教会の、2才から高校3年生までと幅広い年齢の子ども達31名が参加してくれました。

コロナウィルス感染症の影響で2019年以来4年ぶりの開催となる今回は、ケン神父を校長にお迎えし、蓑島神父と共に指導頂きました。千葉助祭とビン神学生の教区神学生2人も、子ども達と積極的に交流して下さいました。また、光星高校から4名の学生ボランティアが参加下さり、会場設営や進行にご尽力頂きました。学生ボランティアの参加は来年以降のサマースクール開催に向けて大いに励みとなりました。

感染症対策のため今回は宿泊をせず日帰り開催となりましたが、動画視聴、永山記念公園での水遊び、ケン神父のクラフト、教会探検、ゲーム等、たくさんのプログラムを通じて、学びと交流を深める事ができました。

ミサの後、夕食のカレーを一緒に頂き、花火をする頃には、仲間との別れを惜しむ表情が子ども達にもリーダーにも浮かんでいました。これからも小教区が連携して、子ども達の交流の場を作り存続して行けるように、皆様のご協力とお祈りでどうかお支え下さい。

（北一条教会・日下修一）

札幌教区青少年委員会主催　タイボランティア

7月25日から8月4日まで、札幌教区青少年委員会の主催で、タイボランティアが行われました。これは、2016年～2019年フィリピンで実施されていたものの再開で、新型コロナウィルスの影響により4年ぶりの開催、北海道内の高校生13名と引率者3名が参加しました。

今回のボランティア活動は、タイとミャンマーの国境にある、タイ、ラ・サールの施設である「バンブースクール」と「ブルースカイホーム」で行われました。施設では、少数民族やミャンマー難民の子どもたちが学んでおり、ほとんどが無国籍の子どもたちです。参加者たちは、日本語を教えたり、一緒にお好み焼きを作ったり、ほうきを作ったり、スポーツ交流体験などを通じて、子どもたちと心を通わせました。

参加者たちからは、「過酷な境遇にある子どもたちの笑顔の強さと生き方に感銘を受けました。」

タイ・ミャンマー国境にある、タイ、ラ・サール施設
「バンブースクール」にて

「子どもたちの笑顔はまばゆく、『幸せとは何か』を考えさせられました。答えは出ませんが、世界中の孤児を支える仕事をしたいです。」「無国籍とは、私たちが当たり前と思っている権利が認められていないことを理解しました。」などの感想が寄せられました。

私たちは、今回の経験を日常の活動に生かし、今後も継続的に関わって欲しいと願っています。また、このプログラムを可能にしてくださった札幌教区の皆様とスタッフに深く感謝申し上げます。

（函館ラ・サール　韓　徳）

FMM x カトリック全道青年会
青年との祈りの集い in 札幌修道院
～日本宣教１２５周年を記念して～

7月16日～17日、マリアの宣教者フランシスコ修道会札幌修道院で1泊2日の青年の集いが行われました。事の起こりは、札幌修道院の姉妹達が日本宣教125周年を迎えるこの年、青年のために何かしたいと勝谷司教にご相談したところ、青年会担当の佐久間神父とつないで下さり、とんとん拍子でこの集いが決定しました。

1日目19時、主日ミサから始まり、まず125年間の私たち修道会の歴史を紹介。熊本のハンセン病者のため派遣された最初の5名の姉妹達の姿から、選び、行動する基にある価値について振り返り、それぞれ自分が持っている価値観を確認するゲームで気づいたことをわかちあいました。22時、佐久間神父のギターによるテゼの祈りで一日の振り返り。その後の交流会、始まったのは23時近く…やはり若者たちは元気でした。

2日目早朝、眠そうな目をして皆が朝ミサにやってきました。一番後ろに座った青年たちと平和の挨拶で振り返った高齢姉妹達のうれしそうな表情が忘れられません。青年たちと共にいる、共に祈ることが喜び、力となっていました。

2日目の朝は、自分の人生を川に見立て、自分の価値観がどうやって形作られたのか、自分の生き方に影響を与えたであろう出来事や出会いなどを含めこれまでの歩みを振り返り、皆でわかちあいました。青年たちのいよいよバーベキュー。佐久間神父が留萌からすべてを準備して持ってきてくださいました！16時解散までゆっくり食事と会話を楽しみました。

「オンラインで話をしたりしていたけれど、やっぱり対面は違う。ここで出来てよかった。うれしい」と話してくれた世話係の青年。祈りも、作業も、たわいない会話も、一緒にいることで何かが生まれてくるのを私も感じました。深いわかちあいも、耳を傾けてくれる友がそこにいるから生まれてきたのではないでしょうか。そして、「あなたがたと共にいる」と言われる主が、この関わり、交わりの中に、私たちのただ中におられることを確認した時でした。

青年たちとの出会いを主に感謝しました。青年たちが主と出会い、それぞれの賜物を活かし、その召命を生きることができればどれほど幸せなことでしょうか。私たちが少しでもその歩みに寄り添えることは、何よりの喜びです。また、この続きができることを願いつつ。

（マリアの宣教者フランシスコ修道会・内田 雅）

正直な、心からのわかちあいは、仲間としての信頼が彼らの内ですでに出来上がっていたからでしょうか。ちょうど駆けつけて下さった勝谷司教は一人一人の深いわかちあいに感謝され、青年たちに温かいメッセージと祝福をくださいました。

カトリック高校生連盟
2023年サマーキャンプ in 留萌教会

今回のキャンプは、留萌教会にとっては地元。2泊3日と少し長いようで短いキャンプを楽しみました。キャンプのスケジュールは自分たちが何をしたら楽しめるか考え計画を立てました。

1日目は「海に行きたい！」という意見が多かったので、ゴールデンビーチに行きました。すごく海を楽しんで貰えて嬉しかったです。夕方は晴れて夕日が綺麗だったので、比布温泉へドライブ。コロナが落ち着いて久しぶりの温泉。足湯にも入れて幸せでした。夕食は緊急災害時に食べるレトルトビーフシチューを食べました。

2日目は、午前中苫前に行き三毛別羆事件史を見たのですが、十一面観音様の祭典が開かれていて、滅多に見られない像を見ました。午後からはカニ釣りに。丁度雨が降ってきましたが、カニ釣りに夢中で雨を忘れる仲間が居てすごく楽しんでいるなぁ！と感じました。夜はBBQで、私は久しぶりに焼きマシュマロを食べました。焦がさないように表面がカリカリするよう必死に頑張りました！そしてお楽しみの花火！打上花火や普通の花火をワイワイ楽しみました。その後、神居岩温泉で疲れを癒し、夜は怖い話で盛り上がりました。

3日目は、役割分担をして共にミサを捧げました。皆のため、家族のため、共同祈願も一人ひとり願いました。どうか一人でも多くの願いが聞き入れられますようにと思いを込めて。ミサの後は神居岩キャンプ場に行き、だるまさんが転んだ！をして最後の最後まで楽しみました。

生憎、雨が多くキャンプ場ではなく留萌教会での合宿となりましたが、地元なのに様々新しいことを学び、そして充実した3日間でした。また、機会があればサマーキャンプに参加したいと思います。

（留萌教会・高3・吉松真南）

北海道カトリック中高連盟 教職員研修会

9月21～22日、藤学園キャンパスを会場に標記研修会が開催され、全道8カ所のカトリック学校より、スタッフ含め約30名の教職員が参加しました。

今年度より、北海道カトリック中高連盟と札幌教区カトリック学校支援委員会の連携協力のもと、委員会メンバーである上杉神父、松村神父、品田が原案を提案した上で、担当校藤女子中学高校の石川校長と話し合い、プログラムを作成しました。

講話Ⅰ「北海道とカトリック」（勝谷司教・永田理事長・品田）、講話Ⅱ「カトリック学校として大切にしたいこと」（上杉神父）、講話Ⅲ「これまでのカトリック学校」（松村神父）の他に、「〝祈り〟について」（藤女子中高・吉武教諭）を学ぶことができました。また、懇親会やグループワークでは、互いに他校の様子を分かち合う機会となり、今後ますます道内カトリック学校の連携が強まるよう願っています。

（品田典子）

カトリック高等学校 三校合同研修会

10月12日（木）～13日（金）、札幌光星高校を会場に、札幌光星、北見藤、旭川藤星の3校の教職員12名が集まって教育研修会を行いました。この三校合同研修会はキノルド司教の教えのもとに開校されたカトリック学校3校が教職員の研修を深めるために2022年6月から始められ、4回目となります。

6月は初任者層、10月はミドルリーダーの教職員を対象とした研修会で、会場は札幌、旭川、北見でローテーション開催、夜は教育懇話会も開催しています。

開会式では、光星学園理事長である山﨑政利神父から挨拶とお祈りをいただき、その後、講演Ⅰ「教皇フランシスコの〝教育のためグローバルコンパクト〟とは」を演題としたご講演をいただきました。教皇フランシスコが2019年に提唱した「全社会参加の新しい教育への取組」を再構築する呼びかけ、多様な人たちが分断され排斥される社会ではなく、相違を超えて結び合わされる社会を造る架け橋になること、そのために既存の教育機関も、変革への勇気を持つように励ましていることを、具体的な7つの目標とともに実践例を示してのご講演でした。

講演Ⅱは、元北海道教育指導監の村田尋如氏に「求められる教師の姿～学習観の転換～」という演題でご講演いただきました。めまぐるしく変化する社会において今、日本の教育は第3の大変革期にあり、世界と日本の情勢を踏まえた日本社会に根ざしたウェルビーイングの向上、学力観や学習評価の変化が求められていることを学びました。また、学校がやるべきことの確認、カリキュラムをはじめ、建学の精神に基づきどのような人間に育ってほしいか、またどのような人間を受け入れたいかの検討という流行を捉える変革の姿勢がリーダーに求められることをご教示いただきました。

参加者は、研修の分かち合い、グループディスカッションをとおして各校の実践や課題の共有を行い、カトリック学校に勤務する教員どうしのネットワークが構築されました。学校という閉鎖された空間から離れ、同業他者との交流を深めることの大切さを肌で感じ、自校の実践への活力を得られた実りある研修、この恵みに感謝します。との声もあり、この研修が2つの講演に共通したキーワード「変革への勇気」を与えたくれものと確信しています。

（旭川藤星高校校長・山本周男）

訃報

◆殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会

Sr.M.ダミアナ
齋藤 京子

9月19日午後5時28分、老衰のため花川マリア院にて神様のみもとに召されました。96歳。

【略歴】
1927年7月20日生まれ
1949年12月24日受洗
1956年3月19日入会
1964年9月23日終生誓願
2018年11月3日ダイヤモンド祝

Sr.M.ユージニア
三浦 玲子

10月14日午前1時28分、呼吸器不全のため札幌東徳洲会病院にて神様のみもとに召されました。91歳。

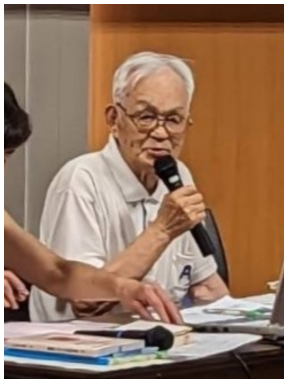
【略歴】
1932年1月5日生まれ
1949年10月1日受洗
1956年9月15日入会
1964年9月23日終生誓願
2018年11月3日ダイヤモンド祝

2023 平和講演会・平和を求める一日 【カトリック札幌教区正義と平和協議会】

8月5日、札幌教区正義と平和協議会（教区正平協）は、札幌教区カトリックセンターにおいて「中央道開削工事・常紋トンネル工事の実相に触れる…」をテーマに平和講演会を開催、会場23名 オンライン13名、合計36名が参加した。

「中央道開削工事・常紋トンネル工事」は、明治・大正時代、国策として行われた大工事で、多くの労働力を要したため、囚人や本州から騙して連れてきた人を労働力として酷使し、亡くなった者や働けなくなった者は線路の下に生き埋めにした。

講師は石田國夫氏(北26条教会・写真左)。「札幌郷土を掘る会」元代表。講演では、若い頃常紋トンネル発掘作業に関り、「草の根が絡まった頭蓋骨を土の中から掘り出した際の感覚を忘れることはできない」と語った。



また、8月15日、教区エキュメニカル委員会と教区正平協の協働により、札幌教区カトリックセンターにおいて「平和を求める一日」を開催。正午、カテドラルの平和の鐘の音を合図に集合し、勝谷司教の挨拶に続き、音楽ライブやドキュメンタリー「沖縄・再び戦場へ」上映や沖縄訪問報告、蓑島神父による「平和を祈る会」などが行われた。参加者による「平和の1分スピーチ」もあり、小教区や地区を超えて平和への思いや願いを分かち合った。会場は様々なパネルや花で彩られた。

18時からはクリスチャンセンターへ移動。プロテスタント教会の平和集会に合流の後、一緒に大通公園まで平和行進をした。参加者はオンラインも含めて約50名だった。

（教区正平協・鳥居明子）

平和行進

平和を求める一日の会場

ハラスメント意識調査 回答締切迫る今月末迄

カトリック札幌司教区ハラスメント対応デスクが実施する「ハラスメントのない教会共同体をめざして・教会におけるハラスメント意識調査」の締切が11月30日に迫っている。10月31日現在、495通が寄せられているが、デスクではより多くの協力を呼びかけている。調査は所定の封筒での郵送の他、下記QRコードからWEBでも回答できる。

ともに生きる 無関心と無意識の偏見

外国人を取り巻く大きな変化が、この秋に予定されている。「外国人技能実習制度」の見直しである。今回の見直しでどんなふうに変わるのか。そう問われることもあるが、私は、制度だけが課題だとは思っていない。技能実習生や特定技能の人々の相談を受ける度に感じるのは、雇用主や関係者の無関心と無意識の偏見である。同じことを日本人労働者にするだろうか？と思うような言動や、言葉も習慣も違うのを承知の上で頑張っている彼らの日本語から何を判断したのだろうかと思うような状況に出会う。手続きに訪れた際に日本人が同行するだけで全く対応が違うという話もよく聞く。悪いばかりではなく、企業でも自治体でも良い事例はたくさんある。関心を持って、その人のことを知ろうとする意識があるかないかで違ってくると私は思っている。

今年は、関東大震災から100年、北海道胆振東部地震から5年を迎えた。関東大震災から100年と言うことで報道番組では特集が組まれ、「福田村事件」という映画も上映されていたことをあなたはご存じだろうか。今、スマホを手に私たちが得る情報の不確かさを知っているはずなのに、無関心と無意識から不安や恐怖が生まれ、行き交う情報に翻弄されてはいないだろうか？

阪神淡路大震災、東日本大震災を経て、北海道や札幌市では胆振東部地震でやっと自分事として防災を考えるようになったと思う。観光客誘致のために使われていた予算は、災害時にあふれる外国人観光客を想定していなかった。ここにも無関心と無意識があったと思う。

改めて考えて欲しいことがある。100年の時を経て、人が自由に移動するようになり、生き方は多様化している。外国人ではなく、外国に繋がる人々という表現も生まれているのに、100年の時を経ても、無関心と無意識の偏見がたくさんあることを知って欲しい。多くの人の関心と意識が変われば、見直される制度は意味あるものになるかもしれない。（札幌教区難民移住移動者委員会・西　千津）

北国のシスターズ

観想修道女として世界の現実と共に歩みたい

厳律シトー会　天使の聖母トラピスチヌ修道院

厳律シトー会は、祈りと労働を生活の中心に据えて神と人々に奉仕する隠世共住修道会です。１０９８年に、フランスのシトーに創立されましたが、歴史の中で改革を繰り返し、17世紀にフランスのラ・トラップ修道院で行われた改革によって、トラピストと呼ばれるようになりました。函館の天使の聖母トラピスチヌ修道院は、１８９８年に、当時の函館教区長、パリ外国宣教会のベルリオーズ司教の尽力によって創立されました。

「厳律」とは「キリスト者として、すべてに超えて徹底的にキリストに従う」という意味です。その生活を律し支えているのは、福音の注釈と言われる『聖ベネディクトの戒律』です。この生活の３本の柱は「祈り」と「聖なる読書」と「労働」です。

毎日共同体でおささげする「聖体祭儀」と「聖務日課」は、私たちの生活の中心であり、主の復活秘義に与かることによって、全教会と世界の人々に、より緊密に一致する恵みの時です。またこの世界の喜びと悲しみ、苦しみを心におさめて、祈りを込めて神のもとへ運びます。

「聖なる読書」は、神のみことばを教会の心で読む祈りです。

「労働」は、互いに協力し合い、共同体としての一致と人間的成長を促す学びの時です。また日々の糧を得るために労することで、社会で労苦する人々と連帯し、労働の実りを可能な方法で分かち合います。

私たちは「聖ベネディクトの戒律」に従って、「定住」「生活改善（清貧と貞潔を含む）」「従順」の３誓願を宣立します。

「定住」は召された場所と共同体の中で、死ぬまで生活するという約束です。「生活改善」は福音の教えに従って、純粋な心で神のみを求め、シトー会の隠世共住修道院生活を生涯にわたって忠実に生きることを約束します。「従順」は、聖ベネディクトの戒律と修道院長のもとに生活することを望み、対話によって共に神のみ旨を探しながら、愛をもって従うことを約束します。

教皇フランシスコは観想について「神を見い出すために神を探し、絶えず探すために神を見い出す（聖アウグスチヌス）」と述べています。これが私たちのキリストへの変容の手段でもプロセスでもあり、私たちの観想生活です。

このような理想と夢をもって、現在40人の姉妹たちが、絶えざる祈りのうちに日々の奉献生活を生きております。

編集後語（あとがたり）

北海道に早い秋が来て、あの異常に暑かった夏が嘘だったかのように、あっという間に冬の足音が聞こえてくる今日この頃です。

今年の夏は本当に暑かった。北海道にもエアコンが必要になってくるとは、子供のころ想像だにしていませんでした。かつて関東や関西に住んでいた頃、北海道の涼しさを懐かしく思ったものですが、最近では、北海道でも暑くて避暑にならなくなりつつあります。気候変動の影響がこれほど身に迫ってくると、地球はいったいどうなるのかを改めて考え、神様のお考えも聞いてみたくなるような今日この頃です。

どこにいても未来への不安は尽きませんが、しかしそれでも、教会はこの北の大地にあり続けるだろうと思いますし、そこに希望は決してなくならないだろうと信じます。さて、わたしたちは未来の子供たちに、どんな教会を残していけるのか、あらためて、この待降節に思いめぐらしてみることとします。

（佐久間　力）